

解説

三輪 泰史

一 戦時下往復書簡の概要

菊池謙一（一九二〇—一九七九）は日中戦争前夜の時代に、羽仁五郎の影響をうけつつ歴史研究をはじめ、マルクス主義の方法によるアメリカ近代史研究の草分けとしての仕事をのこした人である。敗戦後は長野県下伊那で青年層にたいする啓蒙運動、あるいはミチューリン農法の普及を軸とする農村社会運動にとりくみ、一九六二年から七四年まで五回連続で、参議院議員選挙長野県地方区の共産党候補者として活動した。

本篇はその菊池謙一が、アジア太平洋戦争末期の一九四四年五月からおよそ一年にわたり、妻・幸子（一九〇八—一九九六）と交わした往復書簡を翻刻するものである。それ以前、謙一は世界経済調査会、幸子は鉄工聯盟に籍をおく共働き夫婦として、東京都渋谷区原宿の借家で生活を共にしていた。ところがアメリカ軍機による東京空襲が現実味を増すおりから、幸子が病床に伏したことがきっかけとなり、また謙一の研究に専念したいとの希望もあって、幸子は長野県下伊那郡鼎村（現飯田市）の実家に疎開することとなったのである。

往復書簡の第一便は、幸子を疎開先の実家に送っていった謙一が、東京にもどった翌日に書いたものらしい。それを受けとった幸子は、五月二〇日に返信を認めている。こうして東京（はじめ原宿、七月末からは世田谷区経堂）の謙一と、信州の幸子との戦時下往復書簡がはじまった。なお謙一の第一便には、「一週に一回、君に手紙を書きませう」とある。そのあと七月二九日夜に記した手紙には、「今夜から、あなたへの手紙を日記の形に書いて

三分毎ぐらいい出させよう」と記されている。以来、謙一も下伊那に滞在した期間、そろって関西を旅行した期間などをのぞき、両者ともほぼ毎日手紙を書いていたらしい。

私が菊池謙一関係史料の調査のために下伊那を訪れたのは二〇〇〇年春のことだが、そのとき戦時下往復書簡は住む者のいなくなった旧菊池宅（飯田市鼎）の押し入れにしまわれており、謙一から幸子あて書簡は、口絵1のように最後の一通をのぞいて、他はすべて便箋だけが日付け順に重ねられていた。おそらくは謙一みずからが、飯田へ疎開したあと、一通ずつ封筒から抜きだして整理したのであろう。幸子から謙一あて書簡のほうは、口絵2のようにそれぞれ郵便封筒に挿入された状態で、結婚前の書簡をふくめ、いくつか束ねられていた。その数量は現存するものだけでも、謙一から幸子あての書簡が一〇二通一五九日分、幸子から謙一あての書簡は一二六通一二四日分（ただし内一通は封筒のみで中身は不明）にのぼり、そこに幸子から謙一あての「はがき」七葉が加わる（たとえば三日にわたり認めた手紙をまとめて投函した場合は、一通三日分として数えた。同じ日に時間をおいて書いた一つの手紙が、それぞれ別便で郵送された場合は、二通一日分とみなした）。

ただし謙一から幸子あては一九四五年一月三〇日記の書簡のあと、五月二一日～二四日記および五月三一日日記の二通があるだけで、幸子から謙一あても同年二月二四日記のものまでしかない。謙一が下伊那の幸子のもとに疎開するのは一九四五年六月初めであり、それまでは手紙のやりとりも継続したであろうが、たとえば同年三月と四月の日付けのある書簡は皆無である。ちなみに幸子の手紙の記述から、謙一が一九四五年二月の一、二、五、七、八、九、一五、一七日に手紙を出していたこと、また五月二四日、信州から東京に帰着した謙一の手紙文により、彼の留守中に幸子発の書簡四通が届いていたことが確認できる。これらを含め多数の書簡が紛失ないし処分されたのであろう。

菊池夫妻の戦時下往復書簡については、すでに拙稿「菊池謙一の戦時下抵抗」（大阪市立大学日本史学会『市大日本史』第五号、二〇〇二年）、同じく「菊池謙一の歴史思想―戦時下抵抗から職業革命家としての戦後へ―」（長野県現代

史研究会編『戦争と民衆の現代史』現代史料出版、二〇〇五年）が、これに依拠して謙一の戦時下抵抗のありようを考察している。しかし拙稿の書簡の用い方、そこからの原文引用の仕方は、そのときの私の限定的な関心の範囲内で、菊池謙一の戦時下における思想的営み、および交友関係にかかわる記述のみを切り取ったものにすぎず、その切り取った部分でさえ、正確にその意味を読みとり紹介できているのかどうか疑わしい。往復書簡の豊かな内容は、その多くが未紹介のままなのである。

一般にアジア太平洋戦争末期における社会の動向、人びとの日々の生活や思いを知りうる史料は稀少である。行政文書や雑誌・新聞はもちろん、私的な記録のたぐいも量的に限られていて、この時代の社会生活のありようを実証的に解明し、歴史具体的に叙述するのは困難を極める。その意味で菊池謙一・幸子夫妻の往復書簡に記された多彩な記事、その一つ一つにみられる詳細で具体的な描写は貴重であろう。私としてはすでに拙稿に用いた史料であるにもかかわらず、その全文の翻刻・刊行をおこなうに至ったゆえんである。ただし往復書簡の翻刻・原稿化の作業の過程で、その分量が当初の見込みを大幅に超過したため、手紙文のうち書籍からの抜き書きや、読書ノート風の記述の一部を省略せざるをえなかった。紙数の制約上やむをえない措置として、ご了解を乞う次第である。

以下、菊池謙一・幸子の戦時下往復書簡の内容の概略、およびその特徴や史料の意義について、私なりに解説を加えておきたい。ただし謙一の戦時下抵抗の思想にまつわる内容については、前期拙稿を参照していただくこととして、ここで詳しく触れることはしない。

二 日々の暮らしが

遠く離れて暮らすことを余儀なくされた夫婦間の書簡である。とおり一遍のあいさつや用件伝達のための手紙

とは訳がちがう。それぞれが今日一日をどう過ごしたか、身の回りでどんな出来事があったかを相手に伝え、その都度の感慨や思索について理解・共感をえたいとの動機があればこそ、毎日のように便箋上にペンを走らせたのであろう。それだけに記述は詳細かつ具体的で、これを読みつづけていくと、まるで菊池謙一の、あるいは菊池幸子の戦時下の日々を、追体験しているかのように感ずるほどである。まずはそんな二人の日々の暮らしぶりを垣間みておこう。

幸子の父・石井虎秋は外科の開業医であった。その実家での暮らしは、食事の支度や掃除・洗濯、頻繁に訪れる客の接待、それに姪・早苗の子守など、結構多忙だったようだ。一九四四年九月二一日からは看護婦見習として、手術の助手などの仕事も引き受けることになった。それでも台所は当番でない日もあり、東京で勤めに出ていたころと比べれば、時間的には余裕があった。もともと文学好きなうえ、謙一の要請をうけ、歴史や哲学を勉強することを決意していた幸子は、その時間を机の前で有効に使うことを希望したが、計画どおりにはすまない。一番の障害は家内を牛耳る母・キヨの気まぐれだと、しばしば謙一あての手紙で不満をうたえている。東京の職場の仲間から切り離された孤独感も、幸子には堪えがたいものだったらしい。

謙一のほうは一九四四年七月、引越にさんざん苦労した末、身内の学生二人との共同生活を解消し、勤務先である世界経済調査会経堂分室に住み込むことになった。生活費や家事労働が削減でき、通勤時間も不要となったのだから、アメリカ史研究に専念するという点では、恰好の条件・環境をえたといえる。経堂分室は自由な雰囲気職場だったようで、同僚たちとの交流、職場のちょっとしたトラブルなどの報告も面白い。職場の若い人たちを「弟子」としての学習会、学生時代からの友人たちとの交流の記述は、孤独を意識することの多い幸子には、愉快に思えないときもしばしばだったようだ。

そうした日々の暮らしのなかで、一番の問題は食材の確保、食事の準備のことであった。幸子の実家も田畑はもたなかったが、食料事情は東京ほどには逼迫しておらず、患者からいろいろ貰うものもあったようで、当時と

しては比較的恵まれていたのである。それにたいし謙一の方は苦勞つぎだった。謙一発の書簡には毎日のように、その日の食事のメニューや近隣の農家への買い出しの模様、銀座その他での外食のよしあしが記されている。そのうち自炊にも慣れて、友人たちにその「極意」を語るまでになるが、栄養不良が原因とみられる身体のみくみを案ずる記事もある。その延長線上に、一九四五年二月の病臥があったのだろう。

戦時下の暮らしは衣服の面でも苦勞があった。幸子が古着を解いて洗い張りし、それで謙一の「モンペ」や「ブルズ」をつくる、あるいは自分の「ねまき」にするという記載がある。謙一が信州に送ったシャツや「Yシャツ」を、幸子が繕って洗濯・アイロンがけのうえ返送したとも記されている。そんなときはたいいてい果物や餅・豆などを一緒に詰める。むろん衣料よりも食料の送付のほうが頻繁だ。逆に謙一から送られるのは、主には配給品の煙草である。これは幸子の父にとっては必需品で、他にクリーム・書籍・小物類など、都会でないといふ手しにくい品もあった。

このように見ると、戦時下の困窮生活を多少なりとも緩和したという意味で、郵便小包の重要性が浮かびあがってくる。郵便局の混雑や荷物制限に辟易し、小包みが届かないときもきまざる記述もあるが、東京の中心街が爆撃された二〇一五年一月二七日のすぐあと、二月一日の幸子発書簡には「此のころ又、前通り郵便小包みはあたり前に届く様ですね。此の分なら昨日のも三日か四日目には着くでせう」と記されている。三月一〇日の東京大空襲のころはともかく、日本の郵便制度は戦時下においてもだいたいは機能していたのである。このころになると妻子を疎開させた男性の一人ずまいが増えてくるが、彼らには郵便小包のありがたさはひとしおだったにちがいない。

このほか東京での防空宿直の大変さ、信州での地域組織のわずらわしさなど、いかにもこの時代らしい日常の記載が目を引く。それに夫妻の日々の読書熱心には驚かされる。とりわけ謙一の博覧強記ぶり、たとえばギリシャ悲劇・ギリシャ哲学からフランス近代文学やドイツ観念論哲学、さらには星座や気象にまでおよぶ該博な知識と、

それに裏付けられた理路整然の文字史談義・哲学史談義は圧倒的だ。私たちの世代では想定しにくい、旧制高校・大学出身者ならではの「教養」というものなのであろう。

三 市井の出来事

当然ながら往復書簡の話題は、日常茶飯な物事だけではない。幸子が信州で、謙一が東京で、それぞれ見聞きした変事・惨事のたぐいも、しばしば詳しく報告されている。病気治療のために疎開し、やがて妊婦となる幸子の場合、活動範囲は実家とその近辺にはほぼ限られるが、石井家は大家族で人の出入りも多かったため、トピックは割合豊富であった。

一番多いのは患者にかかわるものだが、たとえば一九四四年九月一六日、「頭からずぶ濡れ」た美しい娘が診察につれてこられた。彼女は召集のため帰郷していた若者を横浜から追ってきたのだが、その男は結婚の約束をしておきながら、「召集にかこつけて逃げをうった」らしく、一日遅れで逢えなかった娘は悲観して川に飛びこんだのだという。また幸子らは野外散策のおり、嬰兒殺しの事件に遭遇したが、あとで捜査に関与した医師から聞いたところによると、犯人の娘は姉の出産の手伝いに行ったさい、義兄に襲われて妊娠し、義兄はすぐ出征したため相談相手なく誰にも言えず、産み落とした前後も普段どおりふるまっていたという。そんな悲しく恐ろしい思いをした娘が一八年の刑ときいて、幸子らは「大ファンガイ」だった（一〇月四日の記）。

母の知人の話では、彼が村の床屋にいくと、その「お婆アさん」は出征中の息子の自慢話から始め、散髪の間でも家畜への給餌や昼寝のために時間をとり、終了後は夕飯を食べていくようすすめる始末で、結果六時間もかかってしまった。ある朝、その床屋の前を通ると、「婆アさん」は大声で南洋の島々の名を呼び、その地の兵士たちの無事を祈っていたという（九月一四日の記）。さらに健民修練所につとめる妹が怒りを込めているには、

同所の顧問その他の役についている飯田市医師会の医者たちが、修鍊所を「自分達の私設料理屋位に心得」で、修鍊生たちが眠る時間でも、公の材料を用いて「どんちやん騒ぎ」の宴会をしていた（二月三日の記）。これらの例はいずれも、戦時下ならではの悲喜劇というところであろうか。

謙一が書いて寄こしたもののうちでは、同僚たちに誘われて行った国民酒場の記述が秀逸である（一月十九日の記）。その日は戦果祝いの増配があるとかで、経堂駅そばの国民酒場には八〇〇人近くが押しかけたが、大勢が並んで待つあいだの喧騒、それを四列横隊にととのえて番号をかける店の主人の手ぎわ、呑む順番を決める番号くじが引き起こす一喜一憂、そして呑んで勇ましく朗らかになった「オッサン連」の様子などが、セリフのような対話形式で詳述されていて、まるで映画でも見ているようだ。「酒のみの話は意地汚くて、のむ話ばかりで余り時局談が出ない」と謙一は愚痴っているが、それでも「女のは入る行列の方が殺気立っていかんな」と誰かも言っていたように、食料の行列よりは余裕があって「呑気でいい」という。なおこの謙一発の書簡に頻出する対話形式の文は、「今の時代の日本を形象化した小説」を書く必要があると思う謙一にとって、「小説の勉強」の意味もあつたらしい（二月二八日の記）。

ほかにいくつか例示すると、鎌倉に住む幸子の妹が乳児を亡くしたので、一月二七日、謙一は空襲騒ぎのなかを弔問におとずれたが、妹夫婦が語るには容態が急変したとき、「アパートの人達も一ぱいつめかけてゐて、「僕が帰つて来ると大変なんですよ。みんな泣いてゐて、僕を見ると、旦那さんは一体どこをうろくしてゐたんだなんて怒り出す人もゐる」という。近隣の人間関係あり方が、現代社会のそれとは大きく異なっていたことがうかがえる。

また一月二三日、経堂分室の「小使ばあさん」たちと茶のみ話をしたさい、近ごろは「三つか四つの嬢ちゃん嫁入り道具まで、そつくりそろへた人」や、「男の赤ん坊」が生まれると、すぐ「大学の制服」を作った人のことが話題になった。それをうけて「ばあさん」が語ったところによると、知り合いの大手の息子は婚礼を目

前に召集されたが、それでも嫁入りしてきた娘の「それはお立派な、大変な金目」の嫁入り道具は、まだ「十五、六の嬢ちゃんの時」「物はみんな事変前のもので」揃えたのだという。庶民がその日その日の食糧にも困窮していたとき、金持ちはもっと先のことに心をくだいていたということだろうか。

だが何といっても注目すべきは空襲にまつわる記述であろう。一月二十五日の手紙には、前日昼間の「帝都空襲第一回のもやう」、たとえば超高空を通過する大型米軍機の編隊、「大部分低い所を哨戒的にとぶだけ」の日本軍機、それらを下から仰ぎ見る人たちの、まだ呑気そうな気配などが詳細に記されている。だが同三〇日未明の「恐らく今までに一番猛烈に思はれた空襲」には、分室の家主たちも大騒ぎしたが、謙一は気づかないまま眠り込んでいて、のちにある種の武勇伝のように語られたらしい。その日は「外食券で近処の食堂へ朝食をたべに行」ったが、謙一が耳にした「凄かったね。おばさん。おれんちなんかゆれたぜ」から始まる、その食堂内の会話からも人びとのうけた衝撃がわかる。

会話といえは空襲警報下、なんとか動いてくれた省線電車の中の人びとの様子を、例の対話形式を駆使してえがいた記事も興味ぶかい（二月三日の記）。友人が屋根の上において爆死したという男は、「焼夷弾は大したことないなあ。ふみ消せるよ。だけどバクダンはこわいよ」と話している。二月八日、謙一を訪ねてきた伊藤書店の編集担当者は、荻窪から四谷左門町へ「疎開」するという。荻窪でうけた爆撃は「生きた空もなかった」ほど恐ろしかったが、焼夷弾は消火可能であり、日本橋・神田の焼夷弾による被害もそれ程ではなかったから、かえって都心に近い四谷のほうが安全だと考えたらしい。この種の焼夷弾への楽観視は、大空襲の惨劇を経験する前の段階では、ごく一般的だったのであろう。

翌一九四五年一月九日記の手紙には、米軍機の編隊が強風にあおられながら高空を飛びかう様子や、そのうちの一機へ「白い点のやうな友軍機」が、「正面からツツと近づいたかと思ふと、あつと云ふ間に接触し」、とたんに炎上・空中分解した経緯が記されている。米軍機のほうも飛行機雲とは別の白線を引いて、編隊から遅れは

じめたという。同じく三月一日には、死者推定一〇万人という大空襲があったが、その様相は当該時期の書簡が欠落していて読みとることができない。しかし五月二四日未明の大空襲については、「ゆつくり観戦」したうえで詳しい報告がある。

その日は深夜一時ごろのサイレンで目がさめ、鉄カブトをかぶり非常袋を持って露台にでると、ボーイング機が次々と「探照灯に照らされ乍ら二千米ぐらいの低空で都心に向つたかと思ふと、もう渋谷の方は火になつて」、やがて経堂の南東北三方も火の海と化した。他方、日本軍機の攻撃などにより撃墜された米軍機を、経堂分室の露台から七、八機も目撃できたという。とくに午前二時過ぎ、分室近くの高射砲の砲弾が命中した米軍機は、「凄い火の塊になつて此の辺^邊の地面の石ころまで見えるほど明るくなり」、いったんは上空を通りすぎたが、「異様に弯曲する轟音を発して、その火だるまがこの少し東北の上空でぐつと旋回し、僕の真上へうづまきながら落ちはじめ」たという。夜間低高度からの無差別焼夷弾爆撃は、地上の日本人にとってはもちろんだが、同時に米軍機の搭乗員にとっても、この上ない恐怖だったのであろう。

四 夫婦（男と女）の関係史

ここまで日々の暮らし、時々^々の出来事など、いわばストーリー性とはほとんど無縁のような記述を、往復書簡のうちから抽出・紹介してきた。しかし長期にわたる手紙のやりとりゆえ、そこには当然ながら、ひとつづきの変転を読みとれる要素の記述もある。その最たるものが夫婦の関係史であろう。それも往復書簡の期間中だけでなく、それより前、二人の出会いから恋愛・結婚に至る経過、そして結婚後の生活の様子なども、ある程度記されている。さらにいえば敗戦後、謙一が社会運動に邁進してゆく時期のことを、それなりに見とおすことも不可能ではない。

さて「二人の交友の恋愛としての出発」があった一九三六年当時、幸子が既婚で謙一より年上だったという事情は、二人の恋愛・結婚の重大な障害となった。にもかかわらず恋愛を成就できたのは、「僕はあなたから欲求されてゐることを感じ、僕もあなたを全世界を敵としても欲求すると感じ、この相互欲求の確認」（一九四五年一月二日の記）があればこそであった。

しかし結婚生活はというと、当初から二人のあいだに齟齬があったらしい。謙一の側が願ったのは、夫婦として「二人一単位」になっての人生である。それは日々の暮らしや友人たちとの交流を共にすることはもちろん、思想・世界観や社会へのかかわり方についても夫婦間の一致、相互理解と相互協力を求めるものであった。もともと親しい人への「自己没入的結合」願望の強い人だったらしいが（一九四四年八月九日の記）、そこに社会主義者らしい同志的夫婦像の理想を重ねあわせたのであろう。謙一は幸子に世界観の勉強を要求し、「おしどり夫婦」のように行動することを好んだ。

幸子の側はそんな謙一の対応を、「一方的で押しつけがましく無理解で独善で云々」と思うこともあったらしい（一九四五年一月三日の記）。謙一によると幸子は結婚生活において「当初からずつと受身」で、「二人」という単位ではなく「一人」として「物を考へ、二人の結合を解消可能のものとしてとりあつかふことをやめはしなかつた」（二月二日の記）。幸子としては謙一にたいしある種の負い目を感じ、結婚が一時的なものに終るのを予期するところがあったというから、「時々女権論者風に個人単位の考へかた」（二月二〇日記の謙一発書簡）をした背景には、将来おこりうる別離の痛みにたいし、予防線を張るといふような動機が、意識下で働いていたのかもしれない。そんな葛藤をかかえつつ、それでも当面は仲のよい夫婦としての生活があったのであろう。

しかし謙一がアメリカ史研究を職業とし、みずからの専門研究の社会的意義や、研究者としての自己の使命を自覚するにいたったとき、しかも応召による研究中断が明日にでもおこりうるという切迫感ゆえに、妻の理解・協力のもと、今このときを仕事に没入したいと切望するようになったとき、二人のあいだの齟齬は收拾の

つかないものにまで拡大する。謙一は「僕の全生活の没入を要求する仕事が出て来」たにもかかわらず、「その仕事があなたの生活と無縁だったこと」に不満をつのらせた（一九四四年八月九日の記）。しかし幸子のほうは「自分の仕事に私の興味を引きこもうとする事は、一人ではやれぬから誰か相手を求める、あなたの弱味だ位に思つてゐた」という（一九四五年一月二五日の記）。研究に集中しえないまま焦慮だけがふくらむ謙一は、みずからも仕事をかかえ、健康上の問題がある妻には、夫の仕事をささえるだけの余力がないことに気づかなかつたようだ。

幸子が病に伏したことで、謙一は幸子を信州に疎開させることを決断する。幸子の病氣治癒を一番に考えたことはもちろんだが、仕事の「邪魔」をされたくないとの打算があつたことも否定できないようで、在東京のままの問題解決を希望していた幸子が、疎開を強行した謙一に「恨み」に似た感情を覚えたとしても無理はない。往復書簡がはじまつた一九四四年五月、実は二人の関係はかなりの危機にあつたわけである。

転機となつたのは謙一の労作「プランテーション」（一九四四年中に出版の予定だったがかなわず、ようやく敗戦後の一九五五年、『アメリカにおける前資本制遺制』として未来社から刊行）であつた。幸子が同書原稿を読むことは、謙一の熱望するところだったが、疎開前の幸子はそれに応えられないでいた。なにせ本格的な専門書である。疎開後も容易にはかどらず、そのことに痺れを切らせた謙一は、「せめて早く通読して下さい。若しそれも望めないなら、あなたの愛情へも失望するやうな気がします」とまで述べている（一九四四年一〇月六日の記）。それだけに幸子がノートをとりつつ半年もかけ、同書を読み終えたときの謙一の喜びは大きかった。「僕のプランテーションを丁ねいによんでくれたことを、僕がどんなに嬉しく思つてゐるか。僕にはあなたが難渋や多忙の中で一生けん命に読んでくれて、僕の生活へ熱心に共感してくれたことに、あなたの僕に対する愛情の最大の証左を得たのです。それでこそ僕は、これからの仕事に全力をうちこめます」とある（一月八日の記）。

「プランテーション」は幸子の考えも大きく変えたようだ。幸子自身これに本式にかかることで、「あなたは私

の知らないまに、はるか彼方へ行つてしまつてゐた」ことに気づいたと述べるように（一九四五年一月二日の記）、謙一の才能の大きさを、その仕事の社会的意義に、はじめて眼をひらいたのである。そのことは謙一を誇りに思う反面、幸子の自信喪失にも結果し、自分は謙一の妻としてふさわしくない、との思いこみから悶着を引きおこすことになるが、それ自体は謙一の愛情と誠実とによって容易に克服しうる問題であり、書簡上の関連するやりとりの頻度ほどには重要でない。

決定的なのは「内心からの欲求として勉強を求めた事」はなく、「貴方から云はれる毎にうるさい事だと思」つていた幸子が、「あなたの仕事」あなたの世界観努力と生活努力の統一にあること、そしてそれを私は積極的に理解し、共に前進するのではなくてはいけない事、其のためには今までの私の考へ方一切を根本的に徹底的に変へる他はありません」というように、みずから世界観獲得の努力を誓つたことである（二月二五日の記）。謙一のほうも『『プランテーション』』以後のあなたの本の読みかた、精神的欲求のありかたは、内向的になつた場合を除いて、僕が結婚の当初から願望して来たものの実現を感じてゐるのです」と述べ（二月二四日の記）、「最適の伴侶的理解者を得た喜び」を囁みしめている（一九四四年一月八日の記）。

こうして劇的な恋愛から始まり、結婚生活の長年にわたる齟齬・葛藤をへて、ようやく疎開・別居中に「二人一単位」の關係の夫婦、同志的に結合する夫婦が成立した。謙一にとっては長年の願望の実現であり、疎開を強行したことも結果的には間違ひではなかつたということになる。そんなときに幸子の妊娠が確かなものとなった。文字どおりのサクセス・ストーリーの一種とみなせなくもない。

しかし私には気にかかることがある。一つは、二人の關係性は対等と評してよいものかどうか、というような問題である。当然ながら謙一は、旧來の家父長制的家や男性優位の夫婦關係を志向してはいない。みずからの戀愛を成就させる過程で、家の圧力や世間の因習を正面突破した體驗を有するだけに、むしろそれらにたいする徹底した批判者である。また恋愛から出発した結婚以外の結婚、それぞれの都合で便宜的に男女を組み合わせたよ

うな結婚を、人間関係の合理化・近代化という歴史発展の方向に逆行するものとみなし、友人の見合を阻止すべく懸命の説得をこころみている。

しかし幸子との関係においては、「いつでも友であり、対等の人間だった筈」とはいいながら（一九四五年一月二〇日の記）、実際の書簡の文面には幸子にたいし、指示・指導するような内容・口ぶりが多いことは否定できない（たとえば一九四四年九月五日記の書簡）。幸子が辛辣な言葉で謙一を批判することもしばしばで、謙一もそれを謙虚に受けとめるところがあり、謙一が幸子にたいし權威主義的であったわけではない。それでも謙一の側が、いわば「上から目線」で幸子に対していたような印象はこのころ。

他方で謙一には、幸子に過度に甘え、依存しているように感じられるところがある。たとえば「あなたは普通の読者ではないことを忘れないやうに。僕の妻であり、僕の伴侶的理解者たるべきであり、僕の今その前でむなしくあがいてゐる新しい著述の精神的エネルギーの源泉たるべきなのを忘れないやうに」などという（二〇月六日の記）。「学問でも、芸術でも、創造的生活、創作をする生活」には「真の理解者同情者」、すなわち「伴侶的理解者」が必要で、「性愛によつて結ばれた妻こそ」がその適格者だといふのである（八月一三日の記）。

なんども催促して「プランティション」を読ませたことに象徴されるような、謙一の幸子にたいする強引さ、押しつけがましきは、權威主義や男性優位の発想によるというよりは、このように妻を強く求めるがゆえのものなのであろう。「それを僕がうみ出す為には、あなたが必要なのです。あなたの大きな愛情が。あなたの深く純一で理解に徹した愛情が。それが不満だから僕がこんなに苦しむのです」「だからあなたに強引に、乱暴に求めてやまないのです。（中略）あなたの僕への真の結合を、真の合体を、僕の仕事への合体を求めて求めてやまないのです」というように（一九四五年一月一七日の記）。

幸子の苦勞や健康について、いつも細やかな気遣いをみせる謙一である。自己の性格や行動をかえりみ、それを冷静に分析し、問題点を明らかにする能力も高い（たとえば一九四四年九月三日の記）。にもかかわらず世界観獲

得のための勉強、夫の専門理解のための勉強、すなわち「伴侶的理解者」としての素養にかかわる努力については、幸子にたいし容赦なく高い水準を求めるところがある。こうした幸子への要求は謙一にとって、同志的夫婦という理想像の追求にはかならず、いわば純然たる善意からであっただけに、そのぶん幸子との関係において、これを相対化したり自己反省したりすることが、容易ではなかったのかもしれない。いわば善意にひそむ「盲点」である。

その結果、幸子のほうは懸命の勉強をつづけるとともに、出産前の不安な時期も謙一の研究の邪魔にならないよう心をくだし、不自由な実家での暮らしに一人で堪えることを決意した。そこには通常の男性優位とは異質だが、男女の関係性に非対称な面があったことは否定できない。

関連して、いま一つの気がかりは、敗戦後の夫婦の関係史である。疎開前は信州で中学の教師になる、あるいは知人に就職を世話してもらうなどと述べていた謙一である。しかし敗戦後は生活のことは脇においてでも、青年層にたいする啓蒙運動、共産党の政治闘争に傾注してゆくことになった。そんな夫をささえ、家庭をきりもりした幸子の苦勞は察するに余りある。こうした無理さえ可能にした夫婦間の信頼関係・同志的關係が、戦時下往復書簡の時期に成立したことはすでに述べたとおりである。しかしそこに往復書簡のころに通底するような、謙一の側の強引なイニシアティブ、幸子の側の消極的な受容・受忍という側面はなかったのだろうか。

菊池謙一と幸子とは、愛情にもとづく男女の真の結合を希求し、広く社会の人間関係の解放と合理化のためにたたかった。しかし二人の関係の内側に立ちいってみると、そこには彼らが理想とした男女の対等な関係性とは位相の異なる、非対称な要素が含まれていた。二人の戦時下往復書簡は、そうした関係の実際をつぶさに観察しうる稀有の史料である。たとえばジェンダーの視点からする研究は、菊池夫妻の関係をどのようにとらえ、社会全体の男女関係史のなかにどう位置づけるのだろうか。そんな議論が展開されることを期待したい。

五 歴史への信頼とその陥穽

一九三〇年代の初頭、マルクス主義の思想的影響がひろく社会、とりわけ若い学生・労働者のあいだに浸透した時代、そのころに東京で学生生活を送り、共産主義運動にかかわって挫折を体験した人たちのその後の人生という、私などは即座に野上弥生子の長編小説『迷路』の登場人物を思い浮かべる。心の屈折をかかえながら、生きづらい時代を誠実に歩もうともがきつつ、ついには戦争に呑みこまれてゆく、そのような人生である。『迷路』の主人公・菅野省三と菊池謙一とは、ともに滝川事件にたいする抗議運動にかかわっており、ほぼ同世代と考えてもよい。しかし菊池には菅野のような心の屈折はなかった。菊池はいう。

歴史を学ぶ人間として、僕達は根本的に楽天的です。自分の身に關する限りは全く望みなきに近くとも、人類と云ふことを考へ、歴史と云ふことを考へると、今程晴れ晴れと明るい気持になれることはかつてなかつたと云へるでせう（一九四四年一月一日の記）。

応召による研究の中断、さらには人生の中断がいつあるかもしれない、そんな状況にあった人の言葉である。菅野省三と菊池謙一をわけたのは（もっとも菅野は実在の人物ではないのだが）、一つには、この歴史の進歩・発展、その必然性・法則性にたいする信頼の有無にあったのである。滝川事件のあと一〇年間のみずからの歩みについて、菊池は「現実には僕達を負かし傷つけ転倒もさせたが、とにかく世界観努力をすてず、その中へ現実の敗北をも吸収し、新たな歴史的時代へと自己を保存し鍛へた。今その道にある」と述べている（一九四五年一月一日の記）。菊池の世界観の真骨頂は、「大状況の解釈論にとどまらないところ、つまり自己の生活空間にまでおりてくる浸透性、自己の日常を律する実践性」にあるが（前掲拙稿「菊池謙一の戦時下抵抗」）、それも歴史へのゆるがぬ信頼あればこそであろう。戦時下の日本にこのような抵抗者・抵抗思想があったことの意義を、ここであらためて強調

しておきたい。

ただ問題なのは、その信頼の根拠である。菊池謙一の場合、主要には学生のころより学んだ歴史、とりわけ奴隷解放のプロセスをふくむアメリカの歴史についての知識・理解にあることは、容易に推察しうる。しかしそれだけののだろうか。歴史への信頼ということに関連して、私が気になるのは謙一や幸子のソ連とスターリンにたいする目線、その甘さ安直さである（たとえば一九四四年一〇月一八日記の謙一発書簡）。書簡上に関連する記述はごく稀にしかでてこないのだが、そこには他への言及に比べると、やや奇異に思えるような好意的な評価がある。あるいは菊池夫妻の抵抗の支柱となった歴史への信頼が、社会主義ソ連の存在という現実に関連を置いていた可能性、それこそが資本主義から社会主義へという、歴史の発展法則の正しさの動かぬ証拠と考えられていた可能性はないのだろうか。

歴史の発展を確信するがゆえに、先行する将来モデルとしてのソ連にたいする評価が、おのずと甘いものになるということは充分想定しうる。さらにいえば戦時体制への反発・抵抗が真剣であっただけに、その支柱としての歴史への信頼が強固であることを誰よりも望み、結果としてソ連への深い思い入れが生じたのかもしれない。だとすると夫妻のソ連への思い入れは、相当根ぶかいことになる。さらにはその思い入れが戦時下抵抗のエネルギーとなっただけではなく、当然のもののように戦後へ持ち来たらされ、たとえば夫妻がとりくんだミチュエリン運動などに影響することはなかったのだろうか、それら諸運動の蹉跎の要因となることはなかったのだろうか。検証が必要であろう。

ソ連のような特権集団による強権的支配体制、その体制イデオロギーと化した「マルクス主義」ほど醜悪なものはない。菊池夫妻のマルクス主義はそれとは真逆である。戦時体制にたいする抵抗のなかで鍛えられ高められたマルクス主義であり、特権・利権とは無縁な反体制の思想であった。そしてその思想のままに、戦後の後半生も歩みつづけたのである。それにしても良心的で純粋な抵抗が、ソ連の強権的支配体制に勇気づけられ、その刻

印があとあとまで消えないという皮肉な、いな、残酷なパラドックス。それが恐慌と戦争の時代、革命とファシズムの時代の苛烈さ、その時代を生きた人の運命ということなのだろうか。

一九四五年五月二一日、信州から東京に戻った謙一は、翌二二日記の手紙に「僕はもう本拠をそちらへ移してつて、こちらへ出張して来たやうな感じです。何だかすっきり片づいて了ったやうな。我々の住居は思つたより住みよくて（中略）申し分ありません」と書いています。幸子もすでに鼎の実家をでて、謙一とともに暮らすための住居を、下伊那郡松尾村（現飯田市）に構えていたようだ。謙一の手紙は五月中には困難だが、米の配給との関係で六月「十日までにはどんなことがあつてもそちらへ移つてゐるでせう」と記しているから、六月初旬には謙一も信州に疎開したのであろう。こうして菊池謙一と幸子との往復書簡は終りをつげた。

従来の歴史書の多くは、国民・人民あるいは人類など、抽象化された主体を主語とする歴史であった。それを実在した個々人の体験にそくして、あるいは体験に立ち戻つてとらえなおす試みが、近年ひろまりつつある（たとえば大門正克『戦争と戦後を生きる』小学館、二〇〇九年）。個々の体験の単純な総和が全体史になるわけではないが、生きた人間のリアルな歴史をえがくためには必要な作業であらう。

ここに翻刻・刊行した『菊池謙一・幸子夫妻の戦時下往復書簡』は、苛酷な時代を懸命に生きた一組の夫婦が、みずからの体験、たとえば日々の暮らしぶりや市井の出来事、時々感慨や思索のあと、さらには夫妻の関係性までを、その都度詳細に書きしるした貴重な史料である。この時代に関心のある人、この時代の研究を志す人には、これを読んで菊池夫妻の生活世界のなかに、一度は足をふみいれたいと思う。

〔付記〕菊池謙一・幸子夫妻の戦時下往復書簡の原史料は、菊池夫妻のその他の史料とともに、現在、飯田市立歴史研究所に収蔵されており、遠からず閲覧が可能になるものと思われる。